

ASIA Indicators

定例経済指標レポート

フィリピン 昨秋の台風被害の影響が顕著に(Asia Weekly (5/26~5/30))

～韓国では外需の底入れ期待も、ウォン高が足かせになっている～

発表日: 2014年5月30日(金)

第一生命経済研究所 経済調査部

主任エコノミスト 西濱 徹 (03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
5/26(月)	(ニュージーランド)4月輸出(億 NZドル)	45.0	46.4	50.6
	4月輸入(億 NZドル)	39.6	40.0	41.3
	(シンガポール)4月鉱工業生産(前年比)	+4.6%	+4.3%	+12.1%
5/27(火)	(香港)4月輸出(前年比)	▲1.6%	+4.5%	+3.4%
	4月輸入(前年比)	+2.4%	+4.6%	+3.2%
5/28(水)	(タイ)4月輸出(前年比)	▲0.87%	+0.00%	▲3.12%
	4月輸入(前年比)	▲14.54%	▲18.00%	▲14.19%
	4月製造業生産(前年比)	▲3.9%	▲7.5%	▲10.5%
5/29(木)	(フィリピン)1-3月期実質 GDP(前年比)	+5.7%	+6.4%	+6.3%
5/30(金)	(韓国)4月鉱工業生産(前年比)	+2.4%	+3.1%	+2.6%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

【フィリピン】 ～昨秋の台風被害に伴う影響が景気の足かせとなり、約2年ぶりとなる低成長に～

29日に発表された1-3月期の実質GDP成長率は前年同期比+5.7%となり、前期(同+6.3%)から減速して9四半期ぶりに6%を下回る伸びに留まった。前期比年率ベースでも+4.7%と前期(同+6.9%)から減速しており、業種別では内需の底堅さなどを反映してサービス産業で堅調な動きがみられたものの、昨秋の台風被害の影響などにより農林漁業の生産は落ち込んだほか、製造業をはじめとする工業部門も減速が顕著であった。年明け以降は米国における異常気象などの影響で移民送金が頭打ちする状況が続いたものの、ペソ安の進行でペソベースの流入額鈍化は緩和されて個人消費に底堅い動きがみられたほか、年度初めに伴い公的支出の拡大が景気を押し上げる効果がみられた。一方、年明け以降の米国をはじめとする先進国の景気回復に一服感が出たことや、中国景気の不透明感は外需の下押し要因となることで景気の足かせとなった。さらに、台風被害によりインフラをはじめとする建設需要に下押し圧力が掛かったことも影響したと考えられる。なお、先行きについては先進国を中心とする景気回復に加え、中国経済も外需を中心に底入れの動きが出ていることから、同国にとっても外需の拡大が期待される上、移民送金の流入が内需を支える環境が続くと見込まれ、緩やかな景気拡大を続けるであろう。

図1 PH 実質 GDP 成長率の推移



(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成

図2 PH ペソの名目実効為替レートの推移

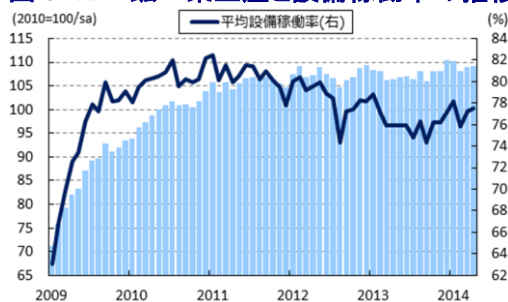


(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成

【韓国】 ～海外経済の回復を追い風に生産は底堅いが、ウォン高が重石となり急速な改善は見込みにくい～

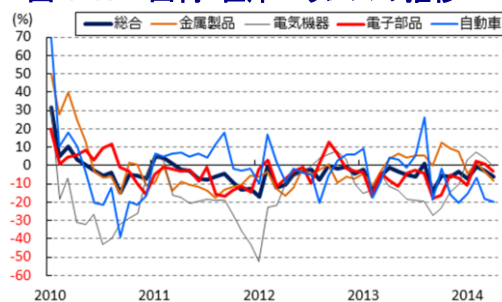
30日に発表された4月の鉱工業生産は前年同月比+2.4%となり、前月（同+2.6%）から減速した。前月比は+0.1%と前月（同+0.9%）からペースは鈍化したものの、2ヶ月連続で拡大しており、平均設備稼働率も77.5%と前月（77.2%）から+0.3p上昇している。米国をはじめとする先進国の景気回復に加えて、最大の輸出先である中国経済でも外需に底入れの兆候が出ていることから、輸出が堅調に推移していることを反映している。ただし、すべての産業で出荷・在庫バランスは悪化しており、海外経済が回復しているものの、足下における通貨ウォン高の進展に伴う輸出競争力の低下が輸出の足かせになっている。したがって、先行きについても外需の緩やかな拡大は見込まれるものの、景気の急回復には繋がらないであろう。

図3 KR 鉱工業生産と設備稼働率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図4 KR 出荷・在庫バランスの推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

【タイ】 ～先進国を中心とする景気回復で外需に底入れの動きはあるが、政情不安が重石になっている～

28日に発表された4月の輸出額は前年同月比▲0.87%と2ヶ月連続で前年を下回る伸びに留まったものの、前月（同▲3.12%）からマイナス幅は縮小した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も4ヶ月ぶりに拡大に転じており、米国や欧州など先進国を中心に景気回復の動きが出ていることに加え、アジア新興国の景気にも底入れの兆候が出るなど外需を取り巻く環境が改善していることが影響した。さらに、昨年秋以降の政治混乱に伴う海外資金の流出により通貨バツ相場が下落基調を強めたことも、輸出競争力の向上に繋がっていると考えられる。しかし、こうした好条件が揃っているにも拘らず、政情不安により一部の政府機能が停止状態に陥るなどの悪影響が外需改善の阻害要因になっていると考えられる。一方の輸入額は前年同月比▲14.54%と9ヶ月連続で前年を下回る伸びに留まり、前月（同▲14.19%）からマイナス幅もわずかながら拡大した。前月比には底入れの動きが出ているものの、これまでの減少を勘案すれば力強さを欠く展開が続いており、政情不安の長期化により国内の消費者信頼感が急速に悪化するなど、内需を巡る環境が悪化していることが重石になっている。結果、貿易収支は+14.53億ドルと前月（同+14.60億ドル）からわずかに黒字幅は縮小したが、3ヶ月連続で黒字を確保している。

また、同日に発表された4月の製造業生産は前年同月比▲3.9%と13ヶ月連続で前年を下回る伸びに留まったが、前月（同▲10.5%）からマイナス幅は大きく縮小した。前月比も+1.25%と前月（同▲2.47%）から3ヶ月ぶりに拡大に転じており、輸出に底入れの動きが出ていることを反映して輸出関連産業を中心に生産拡大の動きが出ている一方、内需低迷に伴い食料品をはじめとする生活必需品関連を中心に生産低迷が続いている。なお、平均設備稼働率は56.58%と前月（64.46%）から大幅に低下しており、石油製品や化学製品のほか、電気製品など輸出依存度の高い産業で改善の動きが出る一方、自動車関連をはじめとする主力産業で軒並み大幅に低下したことが足かせになった。こうした状況を反映して、化学製品関連の出荷・在庫バランスは急速な改善をみせているが、自動車関連では依然低迷を抜け出せていないことから、当面は生産にとっての重石となることが予想される。

図5 TH 貿易動向の推移



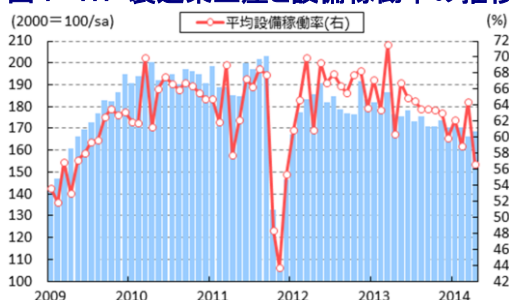
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図6 TH パーツの名目実効為替レートの推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図7 TH 製造業生産と設備稼働率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図8 TH 製造業の出荷・在庫バランスの推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

【香港】 ～中国本土で外需に底入れ感が出ていることを反映した動きは香港でも確認されるように～

27日に発表された4月の輸出額は前年同月比▲1.6%となり、前月(同+3.4%)から2ヶ月ぶりに前年を下回る伸びに転じた。当研究所が試算した季節調整値ベースの前月比も、前月に大きく拡大した反動で減少に転じており、中国本土経済で外需に底入れの動きが出ていることを反映して同国向けは堅調であった一方、米国や欧州などの先進国向けや、ASEANをはじめとするアジア新興国向けの鈍化が足かせになった。一方の輸入額は前年同月比+2.4%となり、前月(同+3.2%)から減速している。前月比も3ヶ月ぶりに減少に転じており、中国本土での外需底入れの動きを反映して部材や素材関連の需要が拡大していることを反映して、日本や韓国、台湾からの輸入は堅調であったが、米国や欧州などの先進国からの輸入やアジア新興国からの輸入には一服感が出ている。結果、貿易収支は▲552.90億HKドルと前月(▲503.65億HKドル)から赤字幅が拡大した。

図9 HK 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

【シンガポール】 ～バイオ・医薬品関連の生産は底堅かったが、機械関連の減産が全体を下押しした格好～

26日に発表された4月の鉱工業生産は前年同月比+4.6%となり、前月(同+12.1%)から減速した。前月比は▲4.68%と前月(同+5.98%)から3ヶ月ぶりに減少に転じており、主力の輸出産業である機械製品関連や輸送用機器関連での減産が全体の下押しに繋がった。なお、月ごとの生産の変動が大きく、その動向が全体に影響を与えやすいバイオ・医薬品関連の生産は前月比+4.07%と前月(同+31.09%)から大幅に鈍化したものの、3ヶ月連続で拡大が続くなど底堅い動きがみられた。しかしながら、バイオ・医薬品を除いたベース

では前月比▲7.33%と前月（同+1.57%）から3ヶ月ぶりに減少に転じており、全般的な生産鈍化が下押しに繋がったと考えられる。

図 10 SG 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[ニュージーランド] ～堅調な伸びは続いているが、主要産品である食料品輸出に一服感が出ている模様～

26日に発表された4月の輸出額は前年同月比+14.0%となり、前月（同+14.9%）から減速したものの、8ヶ月連続で二桁%の伸びが続くなど堅調な推移をみせた。なお、前月比は▲6.5%と前月（同+0.9%）から4ヶ月ぶりの減少に転じており、最大の輸出先である中国向けのほか、豪州や米国向けなどの鈍化が重石になった。財別では、原油関連やアルミなど鉱物資源関連に底堅い動きがみられたものの、乳製品や食肉などの食料品関連で軒並み鈍化したことが足かせになった。一方の輸入額は前年同月比+5.0%となり、前月（同+12.3%）から鈍化した。前月比も▲5.0%と前月（同+4.3%）から3ヶ月ぶりに減少に転じており、石油製品関連は堅調な伸びが続いたものの、素材や工作機械関連の鈍化が輸入の重石になった。結果、貿易収支は+5.34億NZドルと前月（+9.35億NZドル）から黒字幅が縮小した。国際金融市場の混乱一服に伴い海外資金の流入圧力が強まるなか、通貨NZドルの為替レートが上昇基調を強めていることは輸出競争力の足かせになっているものと考えられる。

図 11 NZ 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図 12 NZ NZドルの名目実効為替レートの推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上